

万葉集の地名表現 —— 歌枕化への諸相 ——

竹尾利夫

はじめに

万葉以来、多くの歌人たちに詠み継がれてきた地名（名所）としての「歌枕」は、藤原実方や能因らの王朝びとに始まり、西行や宗祇、そして芭蕉などの詩人の心をとらえ、彼らを旅へと誘った。歌枕の用語は、今では歌に詠まれた土地、もしくは地名を指して使われることが多いが、本来、単に歌の名所地を意味したわけではない。「梁塵秘抄」の、

春の初めの歌枕、霞たなびく吉野山、鶯、佐保姫、翁草、花を見すて、帰る雁

という歌謡に見られるごとき歌枕の用法からしても、歌名所・季語・枕詞・序詞などの和歌に詠み込まれたことばを総じての呼称であった。もつとも『俊頼髓脳』の中に「世に歌枕といひて所の名書きたるものあり」と見えるように、平安期には地名を取り上げた、いわゆる名所歌枕が出現する。藤原範兼の撰になる『五代集歌枕』のごとく、万葉集および古今集より後拾遺集までの五代集から、地名ばかりを含む歌々を、山や海などの項目別に分類配列した地名索引的な書物の現れるのは、その典型的なものと言ってよいだろう。

万葉集には地名を詠み込んだ歌が、集の約半分近くもあり、その

意味では、後世の歌枕にとつての宝庫でもあった。しかしながら、万葉集や古今集といった権威ある歌集に詠まれている地名が、名所歌枕としてどのようにして成立したのか、その文学史的な位置付けは、実のところ定かでない部分を多く含む。万葉集に詠まれている地名は、歌に詠まれたという、そのことのみで歌枕になり得たわけではないからである。土地の性格やイメージを端的に象徴する風物や景物と取り合わされることによつて、また、歌がある特定の情感を伴うことによつて、その地名は名所となり、歌枕として成立したことが考えられよう。以下、万葉集の地名のいくつかをめぐつて、歌枕の成立とその展開の軌跡を考えることにしたい。

一

万葉集には近江・山城の国境である「逢坂山」を詠んだ次のような歌のあることが知られる。

吾妹子に逢坂山のはだすすき穂には咲き出ず恋ひわたるかも

(巻10・二二八三)

吾妹子に逢坂山を越えて来て泣きつつ居れど逢ふよしもなし

(巻15・三七六二)

先の歌の「吾妹子に」は、一般には地名「逢坂山」にかかる枕詞

とされるが、それだけではないだろう。「吾妹子に逢坂山」の詞句が「いとしいあの娘に逢ふ」という逢坂山(『新潮日本古典集成』)と口訳されるように、「吾妹子に」は「逢ふ」を掛詞として「逢坂山」にかかる枕詞だからである。そして、さらに第五句の「恋ひわたるかも」にかかる語としても機能すると言えよう。また、上三句が「穂には咲き出す」を起こし、一首全体の発想と表現とを統括する序詞となっている点も修辞の上で注意したい。

続く二首目の場合も同様である。「吾妹子に逢う」の意を利かせて逢坂山を取り上げ、「その逢坂山を越えてここまでやって来て、泣きながら恋ひ慕っているけれども、逢うすべとてない」というのである。「逢坂山」という固有名詞の裏に人事的な意味を含み込んで表現したところが、この歌の眼目であろう。同類の枕詞として「吾妹子を去来見の山」(1・四四)、「吾妹子を早見浜風」(1・七三)などの例がある。これらは枕詞の用法ではあるものの、掛詞的に次の詞句を修飾する役割を果たしていることから、いわば王朝和歌につながる修辞法を示すものと言えよう。

こうした「逢坂山」の語感ともいうべき地名のもつ複合的なイメージは、平安時代を中心とする古典和歌の世界において、一段とその展開を見ることになる。そして、「逢坂」が、その名から「逢ふ」を連想させることから、それを文芸的技巧として取り入れた歌が数多く詠まれている。以下に見てみよう。例えば、

逢坂の関しまさしきものならば飽かず別るる君をとどめよ

(古今集・離別・三七四)

かつ越えて別れもゆくか逢坂は人だのめなる名にこそありけれ

(古今集・離別・三九〇)

などは、都の人と別れる所であるのに、何故「逢坂山」というのか

と嘆く心を詠んだものである。さらには、逢坂山に設けられた関を男女が「逢ふ」ことの譬喩の意で用いられることも多く、思ひやる心は常に通へども逢坂の関越えずもあるかな

(後撰集・恋一・五一六)

といった恋の歌なども見る。

これら王朝和歌に見られる「逢坂」の地名を詠み込んだ歌々には、万葉集以来の伝統である「吾妹子に逢う」という名の逢坂」のイメージが、その地名一語に凝縮された感があるのは否めまい。「逢坂」のもつ相聞的な属性からは、ここに歌枕としての発生を認めることができよう。

もつとも、万葉集の「逢坂」に当初からこうした属性が付与されていたわけではない。万葉集には、卷十三の作者未詳の長歌中に旅の安全を祈った、

……石田の社の すめ神に 幣取り向けて 我れは越え行く

逢坂山を (卷13・三三三六)

といった歌が見えるが、歌中に「逢坂山」が詠まれているものの、そこには何ら相聞的なイメージや情趣は認められないからである。

また、卷六に見える、天平九年夏四月に、大伴上郎女が賀茂神社を参拝し、逢坂山を越えて近江の海を望んだ折の歌として知られる、木綿畳手向けの山を今日越えていづれの野辺に慮りせむわれ

(卷6・一〇一七)

についても同じことが指摘できる。ここでの逢坂山は旅の安全を祈って幣を奉る「手向けの山」としてうたわれているのであって、歌中の「手向けの山を今日越えていづれの野辺に」の表現からは、むしろ落ちつくべき畿外の地での旅寝の不安な心情が読み取れよう。

したがって、万葉集の「逢坂(山)」を詠んだ歌は、神に対する

祈りや旅の困難がうたわれるものと、「逢ふ」という言葉の語感にひかれて係恋の情が詠まれるものとの両者を含むというのが正しい。前者は古代から受け継がれた伝統を踏むが、後者は新たに生じた抒情の領域のように見える。つまり、万葉集においては、既に歌枕としての「逢坂」の萌芽を見るものの、それらは王朝和歌に見られるような名所歌枕とはなり得ていないということである。

ところで、この逢坂山に設けられた関所が「逢坂の関」である。この関については、延暦十四年(七九五)に「近江国相坂割を廃す」(『日本紀略』八月十五日条)とあり、その後、天安元年(八五七)に復されたことが知られるのみで、いつ設置されたのか定かでない。通説では、延暦八年(七八九)に従来の古代の三関(鈴鹿・不破・愛宕)が廃止(『続日本紀』七月十四日条)されて以降のことと推定されている。

万葉の時代に、既に「逢坂の関」が設けられていたとは考え難いが、古代よりここが東山道や北陸道などの北への玄関口であったことは、大化二年(六四六)の「改新の詔」に次のように記されていることでも明らかであろう。

凡そ畿内は、東は名壑の横河より以来、南は紀伊の兄山より、以来、西は赤石の櫛淵より以来、北は近江の狭狭波の合坂山より以来を、畿内国とす。

近江の逢坂山は、まさに交通の要衝の地であったのである。そしてここを出れば畿外で、前述のように、「逢坂」の地名に人と「逢坂」の意が読み取れるところから、逢うということに格別の感慨をそえられる地として知られたのであった。その結果、「逢坂」は王朝びとにとって特に情趣あることばの響きをもって受容された。百人一首中の歌として人口に膾炙した、蟬丸の「これやこの行くも

帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」(後撰集では第三句「別れつつ」)は、この関で逢うことと別れることを人生の象徴として詠んだ歌の代表と言えよう。

こうした「逢坂」の地名と同じく、地名に何らかの人事的な意味を掛詞として含み込み、歌全体にある種の情緒を表現するものは、万葉集中にいくつもの例を求め得ることができる。例えば「明石(明し)」「真土山(待つ・また打つ)」「御津(見つ)」「竜田(裁つ)」「名張(隠る)」など、枚挙にいとまがない。

二

そこで次に、畿内の西の境界である播磨国の「明石」の地名表出のあり方を見てみよう。万葉集には明石を詠んだ次のような歌がある。

- (1) ともしびの明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見
ず (巻3・二五四)
- (2) 天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ (巻3・二五五)
- (3) 見わたせば明石の浦に燭す火の穂にぞ出でぬる妹に恋ふらく (巻3・三二六)
- (4) 明石潟潮干の道を明日よりは下笑ましけむ家近づけば (巻6・九四一)

(1)・(2)はともに「柿本朝臣人麻呂の羈旅の歌八首」と題詞の付されている歌である。(1)は西下の折の船旅であろうか。明石海峡に船がさしかかる日には、それまで見えていた故郷の大和とも別れを告げて見えなくなるであろう、という家郷への思いがうたわれている。瀬戸内海を船で旅したことのある者ならば、誰しも、生駒・葛城な

どの連なる嶺々が明石海峡を通過するとまもなく、その姿を淡路島の島影に隠すという体験を味わったことがある。明石のそうした地理上の位置が、歌の中で重要な意味をもっているのは、東上時の(2)の歌も同様である。明石海峡を通り抜ければ、そこはもう故郷の山々が望まれる場所であった。「明石の門より大和島見ゆ」は、まさにそうした感慨に他ならない。

(1)のように、明石には「ともしびの」という枕詞が冠せられている。燈明が明るい意から「明石」にかかる一般的な説明されるが、鮮明な写象が感じられるのも事実であろう。集中には「海人のともしび」(7・一一九四)の例もあり、「ともしびの明石」の詞句からは、海人の焚く漁火が沖の波間に漂う光景が髣髴とされる。地名に冠した人麻呂の枕詞には、このように景を情緒的に喚起させるものがいくつも見られる。例えば、同じく「羈旅の歌八首」中の枕詞は、そうしたものの一つである。

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に船近づきぬ

(卷3・二五〇)

右の歌は、一首中に「玉藻刈る」「夏草の」と二つの枕詞が見えることから、「内容は極めて単純で、ただこれだけだが、その単純が好い」(『万葉秀歌』)と評したのは斎藤茂吉氏であった。けれども、これらの枕詞は単に地名の「敏馬」「野島の崎」にかかるというだけでは足りない。稲岡耕二氏が、

「夏草の」という修飾語が冠せられているところから、野草の生い茂る野島に対する作者の心はある程度窺いうるように思う。

「玉藻刈る敏馬」には人の写象を伴うけれども、「夏草の野島」にはそれが無い。自然の荒々しさ明るさはあっても、人見えぬ野島に人麻呂の船は近づいたのである。都をはるかに離れたと

いう思いが深々と人麻呂を浸しているのを感じしめる。^(注3)

と説明されたように、一首は敏馬の海辺で藻を刈る海人たちの姿と、島に一面に生い茂った夏草の景を読み込んだ歌と解してこそ、人麻呂のところに近いと言える。

同じく(3)の歌も、妹に対する恋どころが、遠くに見はるかす「明石の浦」の漁火のようにあらわに人目につくようになったというのであり、実景に基づいた表現と考えるべきだろう。この歌の題詞にも「難波に在りて、海人の燭火を見て作る歌」とある。おそらく明石の浦の「明石」には「明し」(明瞭だ)の意味を響かせているものと判断される。古今集には人麻呂の作として伝えられ、藤原公任が『和歌九品』において絶賛した「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく船をしぞ思ふ」の歌が収められている。この歌に見られる地名「明石」は、万葉集における「明石(明し)」の意味を一段とおし進めたものであることは言うまでもない。既に万葉の時代には、地名「明石」には、語感として「明し」を提示する歌枕的な表現意識があったことが窺われる。

人麻呂の歌に代表されるように、明石を詠んだ万葉歌には瀬戸内海の風光を賞美する表現が見あたらない。(4)の歌も、遠く異郷に旅立った者の、帰京に際して、明石を通過する折の心中のうれしさを表出したもので、望郷と妻恋いの心情が深く一首を貫流している。集中の「明石」は羈旅の歌がすべてであり、ここを通過する旅びとにとつて、畿内西端の地境と意識されていたことから、既述のような特別な感慨があったものと思われる。

また、明石と同様に、「須磨」を詠んだ歌も、この地の性格を考える上で参考になろう。古代において須磨といえは、海人の製塩風景がただちに想起される。

須磨の海人の塩焼き衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず

(巻3・四一三)

須磨の海人の塩焼き衣慣れなばか一日も君を忘れて思はむ

(巻6・九四七)

万葉集には右の歌を含め須磨の詠が三首ある。いずれも海人の製塩風景を詠んで、しかも叙景ではなく序詞もしくは譬喩として用いられているところにその特徴がある。殊に右に掲げた二首は、ともに海人の粗末な「塩焼き衣」を詠み込み、それを恋情へと転化させる点で共通する。古今集の読人知らずの歌に「須磨の海人の塩焼き衣をさを荒み間遠にしあれや君が来まさぬ」(恋五・七五八)とあるのは、万葉集(四一三)の発想を継承したものである。

行政区画の上で、厳密には、須磨は畿内の摂津国、明石は畿外の播磨国である。もつとも両者は隣接していることもあって、須磨も明石と同じく「天離る鄙」の地への出入口と意識されていたらしい。加えて、万葉の都びにとつては、須磨は塩焼きの海人たちの住む異郷世界である。荒涼とした海浜の詩情をさそう光景は、やがて須磨を「海人の塩焼き」のイメージで固定化させていった。

須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛き恋をも我はするかも

(巻17・三九三二)

といった歌のほか、万葉集中には「火気焼きたてて焼く塩の辛き恋」(11・二七四二)、「一日も落ちず焼く塩の辛き恋」(15・三六五二)などと、焼かれる塩の味から、相聞歌に表される恋情へと転化させたものも多い。海人の塩焼くさまを歌い込むのは、彼らがそれを自分自身の心中の焼きつく恋の思いと重ね合わせているからに他ならない。「海人」「塩焼き衣」「焼く塩」といった景物との取り合わせから、万葉の時代に須磨がある程度、歌枕化していたことが知られ

よう。

なお、歌枕としての須磨を考える場合に忘れてならないのは、『源氏物語』の須磨・明石の両巻である。須磨の巻に「かの須磨は、昔こそ人の住処などもありけれ。今は、いと里離れ心すごく、海人の家だにまれになど聞き給へど」などと叙述されるのも、万葉以来の和歌の伝統を踏襲しての表現と見てよい。念のため、万葉集以後の古典和歌を掲げてみても、

須磨の浦の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

(古今集・恋四・七〇八)

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ

(古今集・雑下・九六二)

白波に立ち騒ぐともこりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ

(古今六帖・三)

の歌のように、平安期に入っても、須磨に対する人々の意識は変化することはなかった。むしろ変わるどころか、須磨は歌枕として新たな歌々を醸成して、歌枕としての地歩を固め始めた。そして、その結果、歌壇に広く知れわたるようになったと言える。

『源氏物語』の須磨の巻で、朧月夜へ贈られた「こりずまの浦のみるめゆかしきを塩焼く海人やいかか思はむ」の歌は、右の『古今和歌六帖』の歌を引き歌としていたことが想像される。既に指摘されているように、須磨の巻は『源氏物語』の中で最も高い和歌の頻度(四八首)をもつ。物語が和歌に依存する度合いの著しいことが知られる。

万葉の伝統以来、王朝文学に至るまで「須磨」は「海人の塩焼き」の浪漫的イメージを含むとともに、まさに鄙としての異郷であった。光源氏を須磨へと旅立たせ、そこで望郷流離の試練の日々を課させ

る作品構成を紫式部がとったのも、和歌史の中で培われてきた「須磨」の歌枕としての属性からである。紫式部には、明石・須磨の風土が、望郷や待人への思いをさせさせるにふさわしい土地柄として映じたのであろう。

三

「逢坂山」「明石」と同じく、畿内と畿外を画する南限が紀伊国の「背(兄)山」である。この「背山」は和歌山県伊都郡かつらぎ町背ノ山の地に所在し、通常「妹山」と対をなして作歌されることが多い。万葉集では「妹背の山」(五四四・一一九五・一二四七)、「妹と背の山」(二二〇九・一一〇)の呼称が見られる。もつとも、万葉集の中でも比較的古い時代に属する歌には、背山だけが単独に詠まれていて、妹山のことは全く触れられていない。背山が妹山とともに詠出されるようになるのは奈良時代の万葉第三期に入ってからで、^(注5)異郷の土地の名に興ずる心が起こってからであろう。

丹比真人笠麻呂、紀伊の国に行き、背の山を越ゆる時に作る歌一首

栲領巾の懸けまく欲しき妹が名をこの背の山に懸けばいかにあらむ
(巻3・二八五)

春日蔵首老、即ち和ふる歌一首

宜しなへ我が背の君が負ひ来にしこの背の山を妹とは呼ばじ
(巻3・二八六)

大宝元年(七〇二)の行幸時の作かと思われる右の一組は、「妹山」と「背山」の成立の経緯を物語って興味深い。笠麻呂が山越えをする「背の山」の名に即して、これを「妹の山」と呼んだらどうかと尋ねたのに対し、同行の春日老は即座に「具合よく、背の山と名告つてきた山を、いまさら妹山とは呼びますまい」と答えたという。

万葉びとは「妹・背」の語に特別の情感を抱いていたようである。この二人の言語的な掛け合いによる唱和からは、セノヤマの「セ」に「背」を思い、さらにはそれに伴って「妹」が連想される妙味が確かめられよう。

こうした「背」から「妹」への連想は、ほどなく南海道に沿って流れる紀の川をはさんで、背山の対岸の丘陵に「妹山」の名を生み出したようである。もちろん、いつ頃から妹山が存在したのかは定かでない。けれども、神元元年(七二四)の紀伊国行幸の折には、宮廷歌人、笠金村が「紀伊の国の妹背の山」(4・五四四)と詠んでいることから、聖武朝には妹山が公認された存在となっていたことが知られる。

妹に恋ひ我が越え行けば背の山の妹に恋ひずてあるがとももしさ
(巻7・一二〇八)

吾妹子に我が恋ひ行けばともしくも並び居るかも妹と背の山
(巻7・一二二〇)

巻七に収められた、これら作者未詳の歌は聖武朝の歌詠であろう。歌中には、それ以前の時代の歌々に表出されることのなかった「妹」の名を求めることができる。集中にここを詠むもの十五首に及ぶのは、この「背山」の地が、大化二年の改新の詔に「南は兄(背)山より以来」とあったように、前述の「逢坂山」や「明石」と等しく畿外への境界だからである。また、次のようなことも考え合わせてよいだろう。『日本書紀』や『続日本紀』によれば、万葉の時代に紀伊国へは四回の行幸が見られる。古代の旅が困難とはいえ、海のない大和の宮廷人にとっては、紀伊への旅は憧憬の道でもあった。従駕官人たちが紀伊国の風土に接し、その感興を歌に詠むのは自然なことである。このことは紀伊国に行く旅びととして例外ではないだ

ろう。家郷に恋しい人を残して旅する者には、二つ相並んだ妹山・背山の姿に羨望を覚えたのである。旅びとの家郷への思い、それが異境の地に妻恋いの名にちなんだ「妹山」の名を残すことになったと想像されよう。

紀伊国へ旅行く人々の連想によって生じた「妹山」「背山」の二山は、都びとの間にもよく知られるところとなつたらしい。やがては、一度見たいあこがれの山でもあったようだ。そして、平安期に入ると、他の歌名所と同様に歌枕化への道をたどることになる。古今集に見える、

流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中

(恋五・八二八)

の歌は、大和の吉野川をはさんで対置する山の名を「妹山」「背山」とするもので、万葉歌に詠まれた紀の川のそれではないが、既成の和歌に依存した一種の本歌取りであるとも言える。これなどは歌枕の地名が後世、場所を移動して享受された例にならうかと思う。

また、「妹背の山」を歌中に詠み込むものの、夫婦の意でなく、兄妹の意で用いられた歌が多いのも、万葉以後の王朝和歌の特徴である。

(1) むつまじき妹背の山の中にさへ隔つる雲の晴れずもあるかな

(後撰集・雑三・一二一四)

(2) 君とわれ妹背の山も秋暮れば色変りぬるものにぞありける

(後撰集・秋下・三八〇)

(3) 中にゆく吉野の川はあせななむ妹背の山を越えて見るべく

(小野篁集)

右の後撰集に収める(1)・(2)は、ともに「はらから……」と始まる詞書きを有するところからすると、兄妹(または姉と弟)の仲であ

ろう。吉野川の「妹背の山」とする(3)も、兄妹の恋を描く『小野篁集』の物語内容からして、万葉歌のような夫婦の意ではない。名所歌枕の多くは、地名が歌に詠まれていく過程で、固有のイメージや景物を伴う歌語として発展するが、後世にそれが歌枕として享受される際には、本来の歌枕の保持していた情緒的イメージや語感が変化したり、場所を移動したりする場合がある。既述の「妹背の山」は、まさにそうした変容する歌枕の一つと言えよう。

万葉以来、古典和歌に詠み継がれてきた地名の歌枕は、その萌芽は早く万葉集の時代に認められるが、それに続く王朝和歌の時代にあっても、歌枕が一定の普遍性をもって享受されるという保障はどこにもない。文学作品が時代の移り変わりにより受容のしかたに推移が見られるように、当然、歌枕も時代の趣向を反映させた変化・変遷があると考えるのが正しいだろう。殊に、王朝和歌の時代に入ると、実にさまざまな種々相を歌枕は垣間見させてくれる。そこで次には、万葉歌の読み誤りから、新たな歌枕の生じていく場合の例を考えてみたい。畿内と東国との境である「名張」の場合がちょうどそれである。

四

万葉の時代に大宰府や西国に赴く旅びとにとって、明石が畿内の西の境界であるのに対して、名張は畿内と東国との境であった。『日本書紀』の壬申の乱(六七二年)の記事でも「名張」の地を「東の国に入りたまふ」と記す。名張以東は広義の東国だったのである。それ故、東国へ旅する男たちにとって、家郷への思いが募るころ、都に残された妻もまた、心はおのずと旅先の夫へと向けられた。

我が背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ

(巻1・四三)

右の当麻麻呂の妻の作は、巻四・五一にも重出する。その題詞に「伊勢の国に幸す時に、当麻麻呂大夫の妻の作る歌一首」とあることから、麻呂が持統上皇の伊勢行幸に従駕した際の作歌と推定される。

「沖つ藻の」は、満ち潮になると沖の藻が海水で隠れるという意で、隠れるの古語「ナバル」にかかる枕詞。ナバルの連用形ナバリと地名「名張」とが掛詞になっている。既述の「吾妹子に逢坂山」(10・二二八三)のごとき用法である。名張の地名がことさら歌中に詠まれているのは、ここが畿内の東限で、名張の山を越えるとそこは異郷の地であったからに他ならない。おそらく「名張の山」は特定の山ではなく、大和と伊賀の国境の山一帯を指したものである。^(注6)

また、地名としての「名張」は、大宝二年(七〇二)持統上皇の三河行幸の折にも、長皇子の歌に詠まれている。

宵に逢ひて朝面無み名張にか日長く妹が慮りせりけむ

(巻1・六〇)

上二句は序で、「隠り」と同音の地名「名張」とを掛け起こす一種の技巧である。この序を同じくする類想歌が巻八に縁達師の歌として見える。

宵に逢ひて朝面無み名張野の萩は散りにき黄葉早継げ

(巻8・一五三六)

これら「隠り」と同音の地名「名張」を導く複想の枕詞や序詞の技法には高度な文芸性が認められるとともに、それが一首を支える重みとなっていることも確かであろう。しかも、名張の地名を詠み込んだ万葉集中の三首すべてが、こうした技法を駆使していること

ろを見ると、地名「名張」はある種の語感を伴って万葉びとに享受されていたことが看取される。

ところが、不思議なことに「名張」の地名は、「逢坂山」や「明石」などのように歌枕化されることがなく、古今集以後の平安和歌史からその姿を消すこととなる。いや、正確には別な歌枕へと変容するというのが正しいだろう。万葉集などの五代集から名所歌枕を詠んだ歌を抄出した『五代集歌枕』には、「名張」は次のように掲出されている。

かくれの山 伊勢

^{万二又} わがせこはいづちゆくらんおきつものかくれの山をけふか

こゆらん

当麻磨女

かくれ野

^{同八} くれにあひてあさがははへるかくれの、はぎはちりゆくもみ

ぢはやつげ

「万一又在第四」とあるのは、当麻麻呂の妻の作が万葉集巻一と巻四に重出することを意味する。続く「同八」は、先掲の万葉集の巻八・一五三六番歌である。もつとも、証歌として『五代集歌枕』に載せる万葉歌の訓は、ともに現行の訓と異なる箇所が多くあるが、そのことは特にここでは問題としない。けれども、現行の訓ナバリが「カクレ」と訓読され、その結果「かくれの山」「かくれ野」なる歌枕が伊勢国の歌名所として掲げられている点は重要である。念のために万葉集の原文を示しておこう(引用の原文および訓読は小学館『日本古典文学全集』によった)。

^{よむちひて} 暮相而 ^{むたぢもなみ} 朝面羞 ^{なばりのの} 隠野乃 ^{はぎはちりにき} 芽子者散去寸 ^{もみちはやつげ} 黄葉早継也

(巻8・一五三六)

^{わがせこは} 吾勢枯波 ^{いづくゆくらひ} 何所行良武 ^{おきつもの} 己津物 ^{なばりのやまを} 隠乃山乎 ^{けふかこゆらひ} 今日香越等六

万葉集の原文で明らかかなように、『五代集歌枕』が歌枕として「かくれの山」「かくれ野」の存在を認めたのは、「隠」字を「ナバリ」と訓まずに「カクレ」と訓読した、そのことに理由が求められよう。現在われわれが「隠」をナバリと訓むことに問題はない。名張の地名表記として「隠」の文字を用いたものは「吉隠之^{よなばりの} 猪養乃岡」(巻2・二〇三)の例があるが、「吉名張乃^{よなばりの} 猪養山」(巻8・一五六一)とも書かれる文字表記例を万葉集中に求め得ることができからである。

したがって、万葉集中の「名張」の地名は、原文表記「隠」の一字で記されたことにより、万葉歌が享受される過程で「誤読(あるいは異訓・誤解)され」、^(注7)「隠」はカクレの訓で襲用されたと見てよい。「隠」をナバリと訓むことは契沖『万葉代匠記』以後である。^(注8)それ以前は、仙覚『万葉集註釈』に「かくれと云は伊勢国の名所也」と記すことで代表されるように、シノヒ(元・類・冷・神・細・宮の万葉古写本)、もしくはカクレ(矢・京)の訓の踏襲されることが多かった。万葉集の「隠」の文字表記は契沖による訓を得るまで、古点・次点本の古訓をはじめとして仙覚訓に至っても、ナバリの訓みを獲得することはなかったのである。この間の事情を示すものとして『万葉代匠記』が初稿本・精撰本ともに「隠乃山」をカクレと訓読しながら、その注釈では次のように記していることは興味深い。

隠ノ山ハ伊勢也。此卷下ニ至テ、朝面無ミ隠ニカト長皇子ノ詠給ヒ、第八ニ、朝カホ恥ル隠野トイヘル、並ニ同所ナリ。又此ヲナバリノ山トヨムヘキカトオホユル今按アリ。(精撰本)

『五代集歌枕』に見える「かくれの山」「かくれ野」は契沖以前の古訓をよりどころにしたことから発生した、いわば誤読によって

生じた新たな歌枕と言えよう。『奥義抄』などの歌学書に挙げられた歌枕を検しても「名張」は皆無であり、「かくれの山」「かくれ野」のみが存在する。^(注9)かくして「名張」の名称は万葉集の歌枕を抄出したはずの歌学書の類から消えたわけである。万葉の地名「名張」の変容は、新たな歌枕「かくれ野」の誕生でもあったのである。

五

万葉歌から王朝和歌へ至る歌名所の手引きである歌学書の存在は、王朝の歌びとたちが作歌に際して、地名(名所)をいかに詠み込むかで苦慮していたらしいことを如実に物語る。『能因歌枕』に「関をよまば、あふさかの関・白河の関・衣の関・ふはの関などよむべし」などと、歌を詠むための基本的な歌語としての地名を記すのは、地名が実作の上で知識として必要だったからに他ならない。京都という文化圏を生涯の生活空間とする都びとには、それほど和歌の中に占める地名の位置は大きかったのである。しかしながら、固有名詞としての地名をある特定の情趣を伴って歌一首の中に過不足なく詠み据えるということは、実はそう容易なわざではないだろう。またたとえ現地に臨んで、眼前に展開する景観や風土を叙する場合でも、地名そのものを詠み込むことは、必ずしも叙景歌や羈旅歌を成立させる必要条件ではあり得ない。なぜならば歌中に詠まれている地名それ自体は、それぞれの土地の実体を具体相においてあらわしているとは限らないからである。

確かに、歌に詠まれた地名を熟知している者にとっては、地名はその土地土地の位相にまつわるイメージを想起させてくれる。しかし、それを知らない人びとには、地名は単に無意味な符号的名称にすぎないはずである。万葉集の中にある民謡的な歌の、その類似歌

としてあげられるものの多くが、地名だけを安易に差しかえられても十分にそれが歌として機能しているのはそのためである。

おそらく、平安期に入って、数多くの歌枕の手引き書の類が出現するの右のことと無関係ではあるまい。京や畿内一円の中で一生を過ごし、異郷へ旅をすることのない大方の王朝歌人たちは、歌のそれも歌に詠まれた地名の規範を古典和歌に求めたのである。また、平安期に入つての、いわゆる屏風歌や障子歌の流行も必然的に歌枕に対する関心を深めたことが考えられる。その結果、万葉集や古今集といった権威ある歌集の中に、地名がどのように詠まれているか、そのこと自体が問題となり、歌枕を成立させ発展させる契機になつたと見えよう。それは既述の万葉歌の例で言えば、「吾妹子に逢坂山」のように同音の掛詞を介して独自のイメージを付加するもの、あるいは「明石」のように特別の情感や、特定の景物と取り合わされる地名の例を挙げれば十分であろう。加えて地名と枕詞・地名と掛詞・地名と序詞あるいは歌枕と本歌取りなど、おおむね修辭法的な関係がもたらす地名表現のものに歌枕化の傾向が著しいのも、それらが和歌の表現として規範的な属性を有していたからであつたと言える。その意味では、歌枕は王朝貴族たちの未知の世界に対する憧憬が醸成を促したと言つてよいであろう。

既述のように、万葉集に詠まれた地名のいくつかは、未だ王朝和歌に象徴される歌枕とは成り得てはいないものの、明らかに歌枕化への道を歩む様相を示すものが認められる。一般に、ある特定の地名が多くの歌人に詠み継がれ、その地名に歴史的に形成された固有の情緒が付加し、やがて固定したものが歌枕であるならば、本稿に取りあげた万葉集の地名表現は、そうした和歌史における歌枕の成立と展開の諸相を具体的に示していると言える。

注

- 1 犬養孝「万葉地理」(『万葉の風土』所収、塙書房、昭和三十一年)
- 2 藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅰ』(大明堂、昭和五十三年)
- 3 稲岡耕二「万葉びとにおける旅」(国文学、昭和四十八年七月)
- 4 小町谷照彦「源氏物語の歌ことば表現」(東京大学出版会、昭和五十九年)
- 5 犬養孝「妹と背の山考」(『万葉の風土(続)』所収、塙書房、昭和四十七年)、村瀬憲夫「万葉の旅―人と風土―(九)」(保育社、昭和六十一年)
- 6 犬養孝「万葉の旅(中)」(社会思想社、昭和三十九年)
- 7 奥村恒哉「歌枕」(平凡社選書、昭和五十二年)
- 8 契沖の『万葉代匠記』以後の著作である名所研究『類字名所外集』(元禄十一年)には、伊賀の所在として万葉歌の「隠」をあげるものの「カクレ」と訓読する。ナバリが定訓となるには契沖自身においても時間を要したようである。
- 9 万葉歌の地名「名張」から生じた歌枕「かくれの(野)」は『夫木抄』や『顕季集』に、藤原顕季・源仲正らの歌三首を収めるのみである。これも誤読の結果、生じた歌枕のためかと思われる。